

理学療法学科特任准教授

勘林 秀行
カンバヤシ ヒデユキ

「感性と想像力を高めよう」

私が自分の意思で本を手にし、読むようになったのは高校受験が終わった頃だったと思う。それまでは、夏休みの宿題で感想文を書くためだけの読書がせいぜいだった。子供の頃は近所にたくさんの子供たちがいて、一日中外で遊んでいた。我が家はいわゆる転勤族で、小学校高学年からは概ね田舎で暮らすことが多かった。大自然の中で遊ぶのは実に楽しい、本など読む暇はなかった。特に中学校2・3年生の時は北海道日高地方の海沿いにある貧しい小さな村に住むことになったが、相変わらず釣りや野球など、友達と遊ぶことに夢中だった。その地域は漁師と農家がほぼ半数で、アイヌの人たちも多かった。子供の時は殆ど気にならなかったが、それでも、いざ喧嘩になると最終的には地域で力のある家庭の子供がなんとなく勝つことになる。不条理だがみんなが当たり前のこととして受け入れていた。アイヌの人たちは特に貧しい家庭が多く、様々な場面で差別的待遇を受けていた。そのため、中学卒業後は多くが集団就職で都会に出て行った。

話を戻そう。中学の卒業式が終わると多

くの友達が就職のために都会に行ってしまった。遊び相手がいなくなってしまったのだ。そんな時、父が私に一冊の本を無言で渡した。それは井上靖の「戦国無頼」だった。父がなぜその本をくれたのかは分からないままだが、すっかり本を読む楽しさにはまってしまった。

私が弘前大学に入学したのは1974年、学生運動が停滞し始めた頃だった。それでもヘルメット姿の学生が多くいて、学生自治会では夜中まで議論することもあった。そのときの話題の一つは「部落差別」だった。私には初めて聞く話題だった。学生自治会の役員になったことをきっかけに専門とは別に経済・社会・政治に関する本を読むことが多くなった（「化学科」の難しい数式に嫌気がさして専門科目よりも時間を割いてしまった）。そして、この「部落問題（同和問題）」に関わる小説「橋のない川」と出会った。この頃から、人々が幸せに生きることと差別の問題、アイヌ民族や障害者差別のことが心のどこかに棘のように刺さったのかもしれない。

卒業後は一般の会社に就職したが、30歳



を過ぎてから心機一転、理学療法士をめざし現在に至る。私の専門分野は地域リハビリテーション、主に在宅障害者や高齢者を対象としている。これは、本学の創設者の一人である伊藤日出男名誉教授の影響が大きい。人々の幸せのために役に立ちたいという、理学療法士になることを決めた気持ちに直結したからである。この仕事でいつも心がけているのは、対象者やその家族の気持ちを大切に思うことである。これがなかなか難しい。言葉や表情だけでなく、時にはその裏にあるものを感じ取る必要があるからである。そのためには、その人に関するさまざまな情報を得るだけでなく、五感や想像力を働かせることが重要だ。特にこの想像力に役立っているのは、さまざまな生活環境での暮らしと人々との出会い、多くの小説や映画だと改めて思う。さらには、多くの家族支援をしながら、自分自身の行動やその時に考えたことを内省してきたことだと考えている。

大学の授業ではソーシャルインクルージョン(社会的包括:様々な違いがあることを認識して受け入れ共生していく社会をめざす)という考え方(ノーマライゼーションとも共通する)の重要性の話をしているが、一方で、自分自身の中にはさまざまな偏見や「差別意識」があることも否定できない。これが人間なのだと思う。

皆さんはこれからたくさんのことを学び、経験を積み、多くの人たちを支援することになると思うが、専門の勉強だけでなく、大学生という時こそ、他者との交流や社会経験を通して、また、小説や映画、大自然にも触れて、自分自身の内面に向き合いながら人間理解に努めてほしいと願っている。最

後に、一冊の本を紹介しよう。柳田邦男の「気づき」の力、ぜひ読んでみてください。



「気づき」の力:生き方を変え、国を変える

柳田 邦男

新潮文庫

新潮社

914.6||Y53